

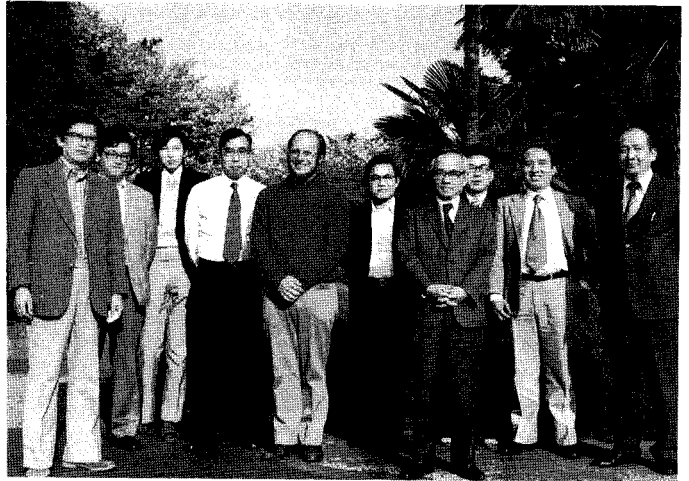
内田さんは、学者としては稀有な実践躬行の士であった。研究もする、教育もする、それ以外で為さなければならぬ様々な仕事をこなしていた。60年代、70年代に流行した多くの大学や学会での諸問題に直面した彼は、政治的な集団としてよりも、学問を学ぶ者としての矜持と良心と見識とを持って、研究行政に真摯に対応をしていた。

東京天文台時代には、その当時直面していた問題を粘り強く解決する努力をし、当時の天文台長からの信頼が厚かった。東京大学に移られてからも重要な方々とよく懇談をされていたと聞いている。

彼は生々流転の現象を好んでいた。太陽の活動的な現象は、磁気プラズマに起因することを若くして悟っていた。電磁流体の擾乱現象の理論的な研究をし、1970年代から取得されだした大気圏外からの観測データと地上の光学、電波域の観測データとを、精力的に活用し、理論の正当性を常に熟考していた。更に、太陽だけにとどまらず、連星系、赤色巨星、T. Tau 型星など、類似な宇宙プラズマ現象にも研究が広がっていった。

彼の理論的研究は、常に新しい観測データを必要としていたし、一方大気圏外から取得された観測事実は、新たな理論を必要としていた。時代は、丁度彼を求めていたかのように思われる。フロンティアの研究と観測とを駆使した彼は、世界中の研究者の注目するところとなり、主な国際研究集会や国内外の多くの大学、研究所に招かれたのは当然のことである。

彼の国際会議へのデビューは、1961年9月京都の「国際宇宙線地球嵐会議」であった。今こそ流暢な英語を話す学生はいるが当時の若い研究者は



1978年国立天文台正門近く

英語での発表には不慣れであった。彼の講演を聞かれた荻原雄祐先生は、「なかなか上手だ」と喜ばれ、将来国際舞台で活躍する姿を髣髴されたに違いない。事実その通りであった。1965年2月に天文学で初めての日米合同の研究集会がハワイで開催されたときにも、又、1977年～78年に開かれたスカイラブの研究会の時でも、彼は堂々と外国の研究者とわたり合って議論をしていた。その実力がみとめられ1979年に国際天文学連合第12分科会の会長に選ばれた。

私が、彼と一緒に外国へ行った最後は1999年、フランス、アカデミー会員のJ-C. Pecker教授にCollege de Franceでの講義に招かれた時であった。講義後、道に面したカフェの椅子に座り、ケーキを食べながら、日仏の文化の類似と差違の話をしたのも昨日の事のようになつかしい。又、Ile d'Yeu (ナントの西、太平洋上の島) に在るPecker教授の別荘ではPecker氏の豊富な話題に触発され、もろもろの議論を交わし楽しい時を共有したのも忘れられない。

科学衛星「ようこう」の Project Scientist として、宇宙科学研究所と国立天文台をはじめ国内の諸大学、研究機関をとりまとめ、又、日・米・英の共同作業を円滑に運営出来るように努力を惜しまなかった。10年間という異例の長寿命の「ようこう」衛星から、数多くの研究成果があがったのも、内田-小川原(宇宙研)-Acton(米)-Culhane(英)の緊密な、信頼関係があったからである。「ようこう」のデータを使って研究するために世界中から太陽物理学の研究者が日本に集まってきた。彼の家では、しばしば、来日した多くの研究者が招かれて、楽しいひとときを持つことが出来た。

彼は教育にも熱心であった。彼の教えを受けた数多くの国内外の研究者が現在世界中で活躍していることから窺える。シンガポールで船主の大オーナーになったかもしれない B. C. Low 氏も、日本学術振興会の招きで彼の研究室に来て、その研究の魅力にとりつかれた一人である。船主への道を捨て、現在は、アメリカ・ボルダの国立大気研究所にて電磁流体现象の研究の実力者となっている。

東京大学を定年で退職後、東京理科大学でも、多くの学生を育て、多くの学生から慕われていた。彼は教師冥利につきる日々を送っていたことだろう。合気道、テニス、スキーとスポーツ万能で頑強な彼が、ご子息の結婚式の場で、しかも親として、御礼のご挨拶を無事に終えられた直後に、倒れるとは、誰が想像出来たろうか。



Collège de France 地下



Ile d' Yeu の Pecker さんの別荘にて

彼は明るく暖かな家族に囲まれて、幸せで豊かな一生を過ごされた。彼のユーモアに富んだ会話や、にこやかな笑顔は常に家庭でも、我々のまわりにも、明るく和やかな、雰囲気をもたらせてくれていた。

今は「光徳院慈教豊隆居士」という戒名を得て天に向かっている彼のご冥福を心から祈ります。

合掌